

アジアを知りたい : 九州大学発アジアへのアプローチ

<https://doi.org/10.15017/13306>

出版情報 : 2006-03-20. 九州大学アジア総合政策センター
バージョン :
権利関係 :

第3章

九大のアジアネットワーク

Approach to Asia

一九二〇年代 中国留学生の選択

岩佐 昌暲

日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究

静永 健

中国・中原地域出土の古人骨に関する人類学的研究

中橋 孝博

アジアに関する新しい知の拠点

アジア総合政策センター

アジアへの最近の取り組み

国際交流推進室

世界の学生と共にアジアを知ろう！

九州大学アジア関連研究一覧

アジアの国際学術・学生交流協定校一覧

一九二〇年代 中国留学生の選択

熊本学園大学外国語学部教授 岩佐 昌暉

大正から昭和初期の九州大学には後に中国文学史に名を残すこととなる三人の留學生が学んでいる。郭沫若(かまくまじやく、…1892～1976)、陶晶孫(とうしょうそん…1897～1952)、夏衍(かえん…1900～1995)の三人である。

郭沫若は中国四川省の出身で、19

14年来日、岡山の第六高等学校を経て1918年夏、九大医学部入学のため福岡にきた。当時、大学は9月に新学期が始まる制度だった。入学後、郭沫若はゲーテ、ホイットマン、タゴールといった詩人の作品を読み、その強い影響下に自らも詩作をはじめた。彼の詩は自分の生まれた封建的な中国社会への叛逆と、自我解放の主張を綴ったものだったが、彼はそれを松原の広がる箱崎海岸の白砂青松や、博多湾の風景を背景にうたった。それらをまとめて1921年出版された詩集『女神』は同時代の中国で大きな反響をまきおこし、中国ロマンティズム文学の源泉の一つとなった。郭沫若は1923年卒業するが、医者にはならず文学の道を進み、同時に革命家として活躍する。

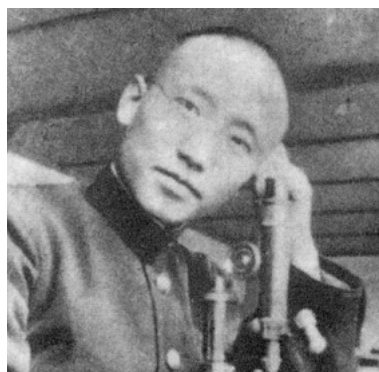
郭沫若に1年遅れて、やはり九大医学部に入學した者に陶晶孫がいる。陶は江蘇省無錫の旧家に生まれ、小学校のときから日本で育った。九大ではオーケストラに所属、当時の演奏会のプログラムに彼の名(陶熾…とうし)を見出



夏衍



陶晶孫



郭沫若

することができる。九大時代に陶は郭沫若とともに同人誌をつくり、郭の文学的盟友だった。郭沫若夫人は佐藤をともという日本人だが、陶晶孫は彼女の妹みさを妻としている。陶は文学と音楽の才能に恵まれた多才な青年だった。しかし郭沫若と違って医学と関わりをもちながら文学活動続けた。

郭沫若と陶晶孫はともに創造社に属して活躍した。創造社は1920年代中国の文壇を文学研究会と二分した有力文学団体で、1921年東京で結成され、メンバーはすべて当時日本で学ぶ中国人留學生だった。創造社の成立には、箱崎の地が関わっている。郭沫若が福岡に来て間もなく、彼は下宿近くの箱崎宮参道で張資平という青年に出会う。張資平は後に通俗的恋愛小説作家として知られるようになるが、当時は第五高等学校(今の熊本大)の学生で、この日箱崎海岸に海水浴に来ていたのである。二人は一高予科時代すでに顔見知りだった。このとき二人は自分たちで新しい文学雑誌を作る

うと話し合う。箱崎でのこの偶然の出会いが、三年後創造社の結成をもたらすのである。

この二人の卒業後の1926年、九大工学部に入学したのが夏衍である。夏衍は浙江省出身。明治専門学校(今の九州工大)に留学、在学中に国民党に入党、日本支部組織部長となった。九大入学は留学生に支給される奨学金を得て政治活動をするための方便だったから、実際にはほとんど授業など受けず、翌年には帰国して共産党に入り、党の指示で左翼文芸活動に従事した。映画と演劇の分野で活動し、今日の中国映画と演劇の基礎を築いた。

いま駆け足で紹介した三人は、いずれも中国現代文学の歴史の中で大きな役割を演じた人々である。だがそれは彼らが九大で学んだ専門知識を生かした結果ではなかった。逆に彼らは専門を捨てたのだ。郭沫若は卒業に当たって国内から来た医師への誘いを「医者ほどだけがんばっても少数の患者の疾病を治せるだけだ。祖国を早く目

覚めさせるには文学が必要だ」として断ったという。九大に学んだすべての留学生が郭沫若らと同じ道を歩みえたわけではない。だが、もっと大きな目的のために学んだ専門を捨てた彼らの選択(生き方)には、日本が中国に対する政治的、軍事的圧迫を強めていた時代の、中国留学生に共通する思考の原型が象徴されているように思う。



1942年生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。05年3月まで九州大学大学院言語文化研究院教授。05年4月より熊本学園大学外国語学部教授。著書『中国少数民族と言語』(光生館、1983年)、『紅衛兵詩選』(共編著、中国書店、2001年)、『文革期の文学』(花書院、2004年)、『八〇年代中国の内景—その文学と社会』(同学社、2005年)など。

Masaaki Iwasa
いわさ・まさあき

郭沫若の見た博多

「九大は九州という島の博多湾に位置する。暖かいため、桜の開花は東京や京都より一カ月も早い。その鏡のような、波ひとつ立たぬ博多湾は一本の極めて細い土手―海ノ中道によつて外の海と隔てられた。まるで大きな湖みたい。海岸沿いには福岡市の街や市場を除いて、眩しい白い砂浜と青々と茂る十里の松原があるので、ほんとうに景色がわるくないのだ。」「博多の追懐」。

「海辺(注・博多湾)の砂浜には沢山の漁船が並んでいる。わたしはしばしば本を持ってきて中で昼寝をする。わたしは「Inspiration is born of idleness」を信じている。私の作品の多くもここであつたのだ」(1921年10月6日郁達夫宛書簡)

ウージービ

武継平訳 岩佐昌暲編著『中国現代文学と九州』

九大アジア叢書(旧KUARO叢書)九州大学出版会 2005年



①福岡医科大学正門(九州帝国大学医科大学の前身)



②郭沫若在学当時の大学構内、1920(大正9)年

出典：九州大学創立七十五周年記念事業委員会、
『写真集九州大学史1911-1986』、
九州大学出版会、1986年

日本における中国古典文学の 伝播とその展開に関する研究

人文科学研究院助教授 静永 健

研究の概要

この研究は、文科省特定領域科研「東アジアの海域交流と日本―伝統文化の形成― 寧波を焦点とする学際的創生―」(代表・小島毅東京大学助教授)中の35部門に分かれる研究班の一つです。



Takeshi Shizunaga
しずながたけし

中国古典文学専攻。
現在は主に六朝～唐の詩文、そしてその影響を強く受ける日本の中古・中世の書籍文化史を研究。
著書に『白居易諷諭詩の研究』(勉誠出版2000)、共著に『わかりやすくおもしろい中国文学講義』(中国書店2002)、『漢文教育の諸相: 研究と教育の視座から』(大修館書店2005)などがある。

この研究課題は、中国浙江省東岸に位置し、近代以前まで中国最大の貿易港であった寧波(ニンポー)をその研究上の「交差点」とし、歴史、文化、思想上の民間信仰、政治制度、文学、芸術、芸能



○寧波大学とのセミナー

など様々な角度から、中国と日本、そして朝鮮半島や東南アジア諸島までも含む交流の実態と、その中で日本伝統文化の形成過程を考えようとするプロジェクトです。私が代表を務める

研究班は、この千二百年間、日本で中国の古典がどのように読まれてきたかを検証するものです。実は、このようなアプローチは今までは十分に行われてきませんでした。というのも、国文学研究は当然のように仮名文字で書かれたものや日本人が書いた漢詩文を主な対象としていますし、中国文学の研究ではやはり中国本土での創作活動の分析が中心だったからです。研究を進めるにつれ、この空白だった分野に興味深い発見が幾つもあり大変驚いています。

日本にしか残っていない 貴重な中国古典文学

『日本には古く8～9世紀より『文選』や『白氏文集』などが伝来し、その写本が正倉院など各地に残っています。このような古い写本は本国中国にはほ



○古写本調査風景

とんど残っていません。今の中国では、12世紀以降宋元明時代の木版印刷のものが最も古く、両者を比較してみると本文や解釈にかなりの違いがあります。従来これら日本に残る古写本の文字は、日本人の誤写・誤読とされ、顧みられることは稀でした。しかし、シルクロードの中継都市・敦煌から出土した10世紀末の写本『白氏文集』の字句は、それまでは誤写とされていた日本現存のものに一致したのです。中国では早くから印刷技術が発達していましたが、しかし、印刷の過程で間違いがないとは限りません。一方、仮名文字文化を持つ日本では印刷技術の本格的



●中国・寧波市での現地調査

な導入が遅れ、書物は気をつけて丁寧
に手で写されてきました。例えば『源
氏物語』中に引用される漢籍には誤
字が多いとされてきましたが、先ほど
の敦煌本などの考証の結果、実は紫
式部が読んだ写本の方がオリジナルに
近いことがわかってきました。紫式部
から芭蕉・西鶴まで多くの知識人た
ちは、現在の中国に残るものよりも
遙かに良質の中国文学を読んでいたの
です。そのため、中国の古典文学の研
究には、日本に古くから残る異本や仮

名文字で書かれた解釈を参考にする
ことが有益であることがわかってきま
した。現在、中国の研究者の間ではオ
リジナルに近い形で日本に残っている中
国文学の古写本や、古くから日本に伝
わっている古典解釈に関心が集まってい
ます。この研究は「日本に残る古代中
国文化」研究の二面も有しているのです。
面白い例を挙げましょう。「深窓」とい
う言葉があります。日本では今でも「深
窓の令嬢」などと言ったりしますが、
今の中国では使われません。この言葉
は紫式部や藤原定家などが読んでいた
古いテキストの「長恨歌」（唐の詩人白
居易の代表作、楊貴妃の悲劇を綴った
長編ラプストリー）に見えるのですが、
現代中国に伝る「長恨歌」のテキスト
では、その部分が「深閨」になっているた
めに中国語の語彙から消えてしまった
のです。この研究は、私たち日本の文化
を海を越えた広大な視野で再認識す
る研究です。さらに同じ漢字文化圏と
しての韓国やベトナムにも研究の対象
が広がりつつあり、興味が尽きません。

メールマガジン【アジアセンター通信】より研究室紹介 2

中国・中原地域出土の古人骨に 関する人類学的研究 渡来系弥生人の起源を巡って——

比較社会文化研究院教授 中橋 孝博

**日本人のルーツ問題・渡来系
弥生人の源郷を求めて**

日本人の起源はどこにあるのでしょ
うか。弥生人（紀元前5世紀から紀元
3世紀）はそれ以前の縄文人（1万
3000年前〜紀元前5世紀）と大
きく異なった特徴を持つことで知られ



Takahiro Nakahashi
なかはし・たかひろ

1948年奈良県生まれ
九州大学大学院理学研究科博
士課程中退
九州大学大学院比較社会文化
研究院・教授（医学博士）
専攻：自然人類学—主に日本人
の起源問題に取り組んでいる。
現在、中国、シリア、ロシア、台
湾での海外調査を実施中。
著書：「日本人の起源」講談社
（2005）、「倭人の形成」吉川弘
文館（共著）（2002）ほか

ています。それは小柄で鼻が高く四肢
末端が長い縄文人に対して高身長で
面長・扁平顔、そして四肢末端が短い
といったものです。これまでの研究で、こ
うした時代変化は弥生時代に大陸か
ら流入した渡来人の影響に因ること、
そして彼ら渡来系弥生人がその後の
日本人の形成にも重要な役割を果た
したことが明らかにされてきました。
しかし、渡来人の源郷や日本へ入って
きたルート、そして人数の規模といった
疑問は明らかにされていません。最大
の疑問である渡来人の源郷については、



①中国での古人骨調査

朝鮮半島や中国東北地区、山東半島などで渡来系弥生人に類似する集団の存在が報告されてきました。我々はこの10年余り前から、まず日本の稲作文化の源郷とされる長江下流域を調査し、この地も有力な候補であると考えるに至りました。その後さらに、古代中国の政治・文化の中心で黄河文明発祥の地である中原地域（河南省）に手を広げて調査中です。



①中国河南省鄭州市、新石器時代の遺跡発掘現場

中国・中原地域出土骨に関する学際的研究

2003年から現在まで毎年秋に河南省・文物考古研究所を訪れ、日本への渡来問題を考察する上で重要な春秋戦国期から漢代にかけての約600体の古人骨を調査、分析しています。今後も中国の共同研究者の協力を仰ぎながら、人骨形質・抜歯風習・ミトコンドリアDNAの各視点から分析し、過去に我々が手がけてきた江南地方や東北地方及び西域での分析結果やその他様々な古人骨集団との広範な比較研究を通じていわゆる渡来系弥生人の母集団となる地域集団を浮かび上がらせたいと考えています。また、当研究は人類学的調査に考古学的分析を加味した学際的な形での初めての



①台湾大学医学部における金関丈夫人骨コレクションの調査

きた江南地方や東北地方及び西域での分析結果やその他様々な古人骨集団との広範な比較研究を通じていわゆる渡来系弥生人の母集団となる地域集団を浮かび上がらせたいと考えています。また、当研究は人類学的調査に考古学的分析を加味した学際的な形での初めての

取り組みでもあります。人骨が出土した遺跡及び中原地域を中心とする中国国内の文化交流に関する考古学的な調査を行い、人骨情報と統合して形質・文化両面から古代の地域集団間の交流・移動・拡散について考察を加えていく予定です。

研究の面白さと広がり

私は理学部の大学院時代までは遺伝子分析の研究に携わっていましたが、その後はもともと興味のあつた古人類学の世界に飛び込みました。九州大学

シリア・パルミラ遺跡発掘調査



A. 地下墓の発掘（ローマ時代）
B. 地下墓
C. 塔墓



①シリア・パルミラ遺跡 ベール神殿

には金関丈夫先生（医学部教授。1960年退官）（1897～1983）以来の人類学の伝統があり、総合博物館には多数の古人骨が収集分類されています。我々が行っている日本人の形成史の研究は広く東アジア人の形成史を見ていく必要があるものです。そのためにも中国のみならずロシア極東地域や台湾などいろいろな地域の調査も行っており、ますます対象がひろがる興味深い分野であるといえます。

アジアに関する新しい 知の拠点

アジア総合政策センター

九州大学は設立以来、アジアに関わった大学を目指してアジアからの留学生を数多く受け入れており、地域の相互依存がますます強まるグローバル化の進展のもとで、アジアの大学との連携を強化し、共同で問題の解決に当たるなどアジアを重視する戦略を推進しています。アジア総合政策センター（以

下、アジアセンター）は、これまでのアジア総合政策センターを発展的に改組し、現代のアジアを総合的に捉え、政府、地方自治体、企業、市民社会に対して有益で有効な政策提言ができる新たな知的拠点として平成17年7月1日に本学に設置されました。アジアセンターは本学がこれまで築いてきた知的・人的資源を最大限に活用し、学内外の機関と連携しながら「九州大学へ向けばアジアが分かる」と言えるような社会的にも大きな影響力を発揮するセンターとなることを期待されています。具体的には、これまで本学で行われてきたアジア関連研究をさらに活発に行うための牽引車として、国内外の機関と連携しながら政策提言を行うと共に、現代アジアの諸問題に関する学術研究や学術交流、アジアに関する情報の集積と発信、市民向け講座の開催や出版事業などを行っていきます。

部門構成

●アジア現代文化研究部門

現代アジアの社会的・文化的な変動の調査研究

●アジア社会開発研究部門

現代アジアの都市開発や農村開発に伴う諸問題の調査研究

●アジア社会科学研究部門

政策提言を行うための制度的、理論的・実証的な調査研究

4名の専任教員と1名の特任教授の他、アジアセンターの活動を支える構成員として学内の他の研究院やセンターから複任教員および協力教員が配置されています。

政策提言

本学のアジア関連研究のうち政策提言につながる調査・研究については研究費を支援すると共に、センターの知的・

人的資源を活用したサポートを行います。すでに東アジアの少子高齢化問題や東アジア共通の農業政策をテーマとした政策提言が行われています。詳しい提言の内容に関しては<http://asiakkyushu-u.ac.jp/eigen/seisakut-eigen/list.html>を参照ください。

アジア理解講座

アジアセンターではダイナミックに変貌するアジアに対する理解を深める目的で市民向けの講座を定期的に開催しています。これまでも日韓の共同研究の成果として開催された「冬ソナ」





と日韓大衆文化の現在」やフィリピンの気鋭の映像作家を招いての「フィリピンの社会と文化を知る」、中国のメディア研究者による「アジアにおけるメディア文化の交流…中国の若者が見た日本・韓国のテレビドラマをめぐる」等を開催し、好評を博してきました。

アジア塾

上記のアジア理解講座と並行して、

アジアとの文化・芸術交流、国際開発協力、また貿易やビジネス等々、様々な分野でアジアと出会い、交流していく際に必要となる、实际的、実用的な知識やノウハウを提供することを目的とした講演会やセミナーを実施しています。第1回目は「変貌する中国ビジネス環境と経営戦略のあり方」と題して開催し、企業関係者を中心に多数の方々が参加しました。第2回目は「NGO、大学そして自治体のコラボレーション—三位一体の国際協力」と題し、地雷撤去と環境問題の現場に関わってこられたパネリストを迎え、国際協力の課題について活発な討議が行われました。

Soaked in Asia(SIA)

芥川賞作家でアジアセンター特任教授の高樹のぶ子氏が、アジアの文学作品を読み、作家と交流し、文字通り「アジアに浸る」ことで感じた世界を様々な方法で発信します。第1回はフィリ

ピンの文学者で、日本にも翻訳が紹介されているグレゴリオ・C・プリヤンテス氏を取り上げた企画を2006年3月に開催しました。

出版活動

本学におけるアジア研究の成果を幅広い読者層に分かりやすく公開することを目的として九大アジア叢書の出版を行っています。これまでに出版されたのは以下のタイトルです。

- ①「アジアの英知と自然—薬草に魅せられて—」 正山征洋(薬学研究院教授)
 - ②「中国大陸の火山・地熱・温泉—フィールド調査から見た自然の—断面—」
- 〔編著〕江原幸雄(工学研究院教授)
- ③「アジアの農業近代化を考える—東南アジアと南アジアの事例から—」
- 辻 雅男(農学研究院教授)

- ④「中国現代文学と九州—異国・青春・戦争—」〔編著〕岩佐昌暲(元言語文化研究院教授)
- ⑤「村の暮らしと砒素汚染—バングラ

デシユの農村から—」谷 正和(芸術工学研究院助教授)

情報発信

本学のアジア関連研究や情報を紹介するメールマガジン「アジアセンター通信」を月に数回無料で発行しています。ご关心的な方は是非以下のURLにアクセスして、お申し込みください。
<http://asia.kyushu-u.ac.jp/mail/>

アジアセンターに関する詳細については次のURLをご覧ください。
<http://asiakkyushu-u.ac.jp/>



アジアへの最近の取り組み

国際交流推進室



九州大学では、「アジア重視戦略」に基づいて学術研究と学生交流を推進

①世界12大学韓国研究コンソーシアム

1998年、当時の大韓民国・金鐘泌国務総理が九州大学で「韓日関係の過去と未来」と題して講演を行いました。この講演を契機として、九州大学は、韓国国際交流財団から5年間に渡る助成を受けることとなりました。これに応え、九州大学は、1999年に日本の国立大学で最初の「韓国研究」を掲げた施設として、九州大学韓



②2005年6月に行われた世界11大学韓国研究センター国際ワークショップの開講式

世界12大学 韓国研究コンソーシアム

する事業を展開しています(2〜3頁参照)が、ここでは、近年取り組んでいるいくつかのプロジェクトをご紹介します。

国研究センターを設立しました。

2005年、九州大学韓国研究センターのイニシアティブで、韓・中・米・豪など5カ国8大学の韓国研究センター長が九州大学に集い、韓国研究のグローバル・ネットワーク「環太平洋韓国研究コンソーシアム」を構築し、コンソーシアム協定を締結しました。現在は、さらに拡大し、世界の12大学間でコンソーシアムを組んでいます。九州大学韓国研究センターは、その事務局を担い、共同研究やワークショップは、九州大学を中心に実施されています。コンソーシアムの構築により、研究活動のグローバル化とそれに伴う韓国研究のパラダイム・チェンジ、次世代の韓国研究者の育成など、今後の韓国研究の発展に大きな役割を果たすことが期待されています。

国際協力銀行(JBIC)による 支援事業への積極的な取り組み

九州大学では、国際協力銀行(JBIC)がアジア各国で行っている円借款

事業にも積極的に協力しています。

●「中国内陸部・人材育成事業」

石炭鉱山保安環境研修コース

九州はかつて大規模な炭田を多数有し、石炭産業が大いに栄えたことから、九州大学は石炭の生産・利用に関する膨大な研究成果と技術の集積があり

◎「石炭鉱山保安環境研修コース」開講へ向けた中国側とのミーティング



ます。一方、中国においては、ガス爆発を始めとする炭鉱事故や石炭の生産・利用過程で発生する地盤沈下、河川や地下水の汚濁、大気汚染などが深刻な環境問題となつています。そこで、九州大学では、JBIICの支援のもと、2006年に石炭鉱山保安環境研修コースを開講し、これらの問題解決のため積極的に協力をを行う予定です。

●インドネシア「国立イスラム大学保健・医学部事業」に係る調査

インドネシアでは、乳児死亡率が低減し、出生時平均余命が向上するなど、保健医療指標は概ね改善傾向にあります。しかし、医療インフラは依然として脆弱な状態にあり、加えて、医師数の不足が特に顕著となっています。このような状況のもと、インドネシアにおける地方部・貧困層の医療高等教育への機会拡大及び地方部への医師・看護士等の供給を確かなものとするため、JBIICは、円借款を通じた「国立イスラム大学保健・医学部」支援事業を実施しています。

九州大学は、2005年度にJBIICの委託を受け、九州大学病院を中心に「国立イスラム大学保健・医学部事業に係る調査」を実施し、①国立イスラム大学のカリキュラム整備支援、②教員に対する留学プログラム作成支援、③国立イスラム大学保健・医学部の地域医療従事者制度確立の支援を行いました。



○インドネシア農村部のブスケスマス(保健所)

マレーシア日本国際工科大学 (MJ-IUT) 設立へ向けた協力

2001年に開催されたASEAN+3首脳会議におけるマレーシア・マハティール首相(当時)から小泉首相への申し入れを受け、数回にわたる日本政府とマレーシア政府の間協議などを経て、マレーシアに日本型の大学(マレーシア日本国際工科大学・MJ-IUT)を設立することが合意されました。

2005年12月には、MJ-IUTを設立するための準備センター(マレーシア日本国際工科大学準備センター・MJUC)がマレーシアに設置されました。MJUCでは、3年後のMJ-IUT設立を目指し、マレーシア及び日本から派遣された専門家がMJ-IUTの組織整備やカリキュラム整備などを行います。九州大学は日本の他の協力大学と共に、MJ-IUT設立に向けた積極的な協力を行っており、2006年度から本学の工学分野の教員1名を長期専門家として現地に派遣することになっています。

九大のアジアネットワーク 04

世界の学生と共にアジアを知ろう!

留学生のホームステイ受け入れ家庭募集

九州大学サマーコースAsia in Today's World (ATW)

九州大学では、2001年度から毎年7月～8月にアジアを中心とした海外の有名大学から数多くの優秀な学生を集め、「アジアを学ぶ」6週間の短期留学サマーコースATWを開講しています。このコースは、海外の著名大学から講師を招き、アジアの経済、文化、政策などを学ぶ「アジア研究コース」のほか、日本



①ホームステイの様子

語の授業、理系研究室での実験等の指導もあります。さらに、大学外での活動として、世界遺産見学や農作業体験、日本の家庭でのホームステイなどがあり、とりわけホームステイは、学生及びご家庭双方にとつて、とても楽しい経験であったと好評を得ています。

九州大学では、福岡市及び近郊にお住まいで、夏季の3週間(半期)又は6週間(全期間)のホームステイをお引き

受けくださるご家庭(ホストファミリー)を毎年募集しています。

ホームステイを体験した留学生の声

● 今回のホームステイを通じて私の視野は大きく広がりました。文化的な違いや相互にわからない点もありましたが、温かなホスピタリティによって全てが解消され、私は「もう一つの我が家、もう一つの家族」が出来ました。ホームステイでの生活はワクワクすることはわかりました。

● 今もホストファミリーのお母さんと時々メールをします。今の生活ぶりを話したり、悩みを相談したりもしています。ホームステイでは、大切な思い出と共に、新しい自分を発見することができました。いつかきつとまた日本に帰つて、ホストファミリーを訪れようと思っています。

ホームステイ受け入れ家庭募集

●ホストファミリー募集地域

九州大学箱崎キャンパス(福岡市東区)へ公共の交通機関を使用して1時間以内で通学できる地域

●ホームステイ期間

サマーコース「後半」の3週間、もしくは「全期間」の6週間

※「後半」…7月下旬から3週間、「全期間」…6月下旬又は7月上旬から6週間

●参加留学生

アジアを中心とした有名大学の学生です。年齢は概ね18歳～24歳です。

過去の参加大学例:北京大学、復旦大学、香港大学(中国)、台湾大学(台湾)、シンガポール大学(シンガポール)、チュロンコン大学(タイ)、ソウル大学校、梨花女子大学校、釜山大学校(韓国)、オックスフォード大学(英国)、マサチューセッツ工科大学、プリンストン大学、イェール大学、ライス大学、アムハースト大学(米国)

●謝礼

3週間…3万5千円、6週間…7万円

●申込み・問合せ先

九州大学国際交流推進室 電話092-642-4275 FAX 092-642-4273

E-mail: akikouok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb>

九州大学アジア関連研究一覧

2005年

氏名・所属	研究のタイトル	キーワード
阿部 康久 (人文科学研究院助手)	中国国有企業の合併に伴う人員削減と雇用問題の深刻化に関する研究	国有企業改革、雇用問題、遼寧省
後小路 雅弘 (人文科学研究院教授)	近代アジアの美術におけるモダニズムの受容	美術、モダニズム、ナショナル・アイデンティティ、キュビズム
静永 健 (人文科学研究院助教授ほか)	日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究	文選、白氏文集、唐詩選、寧波、古写本(旧鈔本)
小山内 康人 (比較社会文化研究院教授ほか)	ベトナム中部・コンツム地塊の地殻形成プロセス	東アジア、大陸形成プロセス、ベトナム、コンツム地塊、極限変成作用、マントルダイナミクス
酒井 治孝 (比較社会文化研究院教授ほか)	古カトマンズ湖学術ボーリングプロジェクト	ヒマラヤ、ネパール、山脈の上昇、モンスーン、気候変動湖成堆積物、陸上ボーリング
清水 展 (比較社会文化研究院教授ほか)	アジアの現代文化研究リサーチコア	アジア、大衆文化、モダニティ、グローバルイゼーション
中橋 孝博 (比較社会文化研究院教授ほか)	中国・中原地域出土の古人骨に関する人類学的研究：渡来系弥生人の起源を巡って	古人骨、日本人の起源、渡来人、中国、自然人類学
矢田 脩 (比較社会文化研究院教授ほか)	熱帯アジアにおける昆虫インベントリーと国際ネットワークの拡大(TAIIV)	熱帯アジア、インベントリー、昆虫、指標生物群、国際ネットワーク、コレクション、分類学、データベース、モニタリング
小川 全夫 (人間環境学研究院教授ほか)	生涯現役社会づくりプログラムの開発：日米東アジアの比較と協力	高齢化、社会関係資本、農村と都市、NPO
出口 敦 (人間環境学研究院教授ほか)	アジアの都市の仮設空間と賑わいの場に関する研究	都市計画、アーバンデザイン、市街地環境、公共空間、屋台
石川 捷治 (法学研究院教授ほか)	植民地朝鮮における日本人生活誌の再構成	植民地期朝鮮半島、生活誌の記録・再構成、「オーラル・ヒストリー」
藪野 祐三 (法学研究院教授ほか)	地雷撤去システムの開発	飛行船、地雷センサー、NGO
鹿島 薫 (理学研究院助教授ほか)	トルコ・アナトリア高原における鉄器文化成立の背景とその自然科学的考察	トルコ、鉄器時代、ヒッタイト、気候変動、GIS、ボーリング、古環境、成分分析
竹中 博士 (理学研究院助教授ほか)	イラン都市直下型地震の震源断層と強震動予測の研究	都市直下型地震、震源断層、強震動
吉良 潤一 (医学研究院教授ほか)	アジア人視神経脊髄型多発性硬化症患者の免疫遺伝学的背景の解析とそれに基づいた治療法の開発	多発性硬化症、視神経脊髄型、HLA、PAF

氏名・所属	研究のタイトル	キーワード
吉良 龍太郎 (医学研究院助手ほか)	フィリピンで多発する亜急性硬化性全脳炎の宿主側遺伝要因の解明と新規治療法の開発	亜急性硬化性全脳炎、リハビリ脳室内注入療法、遺伝因子
楠原 浩一 (医学研究院助教授ほか)	アジア地域における亜急性硬化性全脳炎の疾患感受性遺伝子の網羅的探索	アジア、亜急性硬化性全脳炎、SSPE、小児、治療、病態、DNAマイクロレイ、網羅的探索、疾患感受性遺伝子、相関解析、インターフェロン、リハビリ、麻疹、フィリピン、パプアニューギニア
清水 周次 (九州大学病院(医)助教授ほか)	アジアー九州医療ネットワークの構築：非圧縮デジタル医療動画のインターネットライブ配信	遠隔医療、DVTS、動画、インターネット、最先端手術
堀内 孝彦 (九州大学病院(医)講師ほか)	アジアにおける免疫・アレルギー疾患の遺伝子解析ネットワークの構築	アジア、遺伝子解析、自己免疫疾患
長弘 千恵 (医学部保健学科教授ほか)	在宅高齢者に対する転倒予防のための訪問指導の評価に関する介入研究	在宅高齢者、転倒予防、無作為割付、訪問指導
平野(小原) 裕子 (医学部保健学科助教授)	九州における在日外国人の精神的健康に関する研究	在日外国人、日本、海外出稼ぎ労働者、抑うつ、生活ストレス、精神的健康
平野(小原) 裕子 (医学部保健学科助教授)	在外フィリピン人労働者の生活実態と生活ストレス：日本および韓国に於ける調査から	外国人労働者、フィリピン人、ストレス
平野(小原) 裕子 (医学部保健学科助教授ほか)	在日コリアン高齢者の介護問題に関する研究	在日コリアン、高齢者、介護、社会的支援、ティケア
平野(小原) 裕子 (医学部保健学科助教授)	在日フィリピン人労働者の受診行動に関する研究	フィリピン人、移住者、海外出稼ぎ労働者、ヘルスケア、医療保険、支援ネットワーク
平野(小原) 裕子 (医学部保健学科助教授)	在日フィリピン人労働者の抑うつに関する研究	フィリピン人、移住者、海外出稼ぎ労働者、家族、抑うつ、生活ストレス、精神的健康
平野(小原) 裕子 (医学部保健学科助教授)	台湾における外国人出稼ぎ労働者の抑うつに関連する社会経済的要因	フィリピン人、移住者、海外出稼ぎ労働者、工場労働者、家事労働者、介護労働者、抑うつ、生活ストレス、精神的健康
今井 亮 (工学研究院助教授ほか)	アジアおよび太平洋島弧のマグマ熱水系における鉱床生成システムの解明	島弧、マグマ、熱水系、金鉱床、斑岩銅鉱床
江崎 哲郎 (工学研究院教授ほか)	三峡ダム貯水池斜面3S(GIS、GPS、RS)システムの構築	中国、三峡ダム、斜面崩壊、GIS
江崎 哲郎 (工学研究院教授ほか)	中国華北平原における地下採掘に起因する地盤沈下とその環境の予測と保全対策の研究	中国、華北平原、渤海、地盤沈下、石炭採掘、地盤環境保全、GIS
江崎 哲郎 (工学研究院教授ほか)	ヒマラヤ山岳地帯の岩盤斜面災害とリスクの軽減に関する研究	ネパール、アグラコラ地域(Agra Khola)、斜面崩壊、土石流、GIS
楠田 哲也 (工学研究院教授ほか)	黄河流域の水利用・管理の高持続性化	黄河、流域、水資源、水利用、水マネジメント、資源配分
島岡 隆行 (工学研究院教授ほか)	衛星リモートセンシングによるアジアメガシティの大規模廃棄物最終処分場モニタリング	アジアメガシティ、大規模廃棄物最終処分場、リモートセンシング
松井 紀久男 (工学研究院教授ほか)	インドネシアにおける資源開発のためのデータベースの構築と周辺環境を考慮した資源開発システムの開発	データベース、資源開発システム、熱帯性雨林気候、リハビリテーション、地球環境問題
松井 紀久男 (工学研究院教授ほか)	インドの長壁式採炭におけるモニタリングシステムの開発	ロングウォール、モニタリングシステム

氏名・所属	研究のタイトル	キーワード
松井 紀久男 (工学研究院教授ほか)	熱帯地域の露天掘り石炭鉱山におけるリハビリテーション工法の開発	露天掘り石炭鉱山、リハビリテーション、AMD問題、フライアッシュ、環境問題
松井 紀久男 (工学研究院教授ほか)	ハイウォールマイニングシステムの導入に関する研究	ハイウォールマイニング、採炭実収率、ハイウォールの安定性、オーガー、コンテナニューアスマイナー
松井 紀久男 (工学研究院教授ほか)	ポンコール金鉱山における最適支保・採掘システムの開発	支保システム、採掘システム、水圧破砕法、岩盤評価
渡辺 公一郎 (工学研究院教授ほか)	インドネシア・スダダ島の地球資源に関する研究	島弧、スダダ島、地球資源、地理情報システム
谷 正和 (芸術工学研究院助教授ほか)	南アジアの砒素汚染農村における住民の適応戦略	砒素汚染、文化的適応、社会的環境
田上 健一 (芸術工学研究院助教授ほか)	海上集落タルクサンガイの集住環境に関する研究	海上集落、タルクサンガイ、持続的集住環境
江頭 和彦 (農学研究院教授ほか)	農学分野における研究パートナーシップの構築	パートナーシップ、研究、ハノイ農業大学、近代的農業技術、環境保全、生態系、持続性
窪田 文武 (農学研究院教授ほか)	北部ベトナム生物資源：作物遺伝子資源における環境適応性の双方向的評価	ベトナム、イネ、マメ、ソバ、環境適応性、地域適応性、作物遺伝子資源
高木 正見 (農学研究院教授ほか)	天敵の利用を中心としたわが国と東南アジアにおける蔬菜害虫の総合的害虫管理	総合的害虫管理、生物的防除、天敵
溝上 展也 (農学研究院助教授ほか)	薪炭材消費と森林バイオマス・生物多様性の持続性との関係ーカンボジアでの事例ー	熱帯林、薪、炭、森林バイオマス、生物多様性、持続性
望岡 典隆 (農学研究院助手ほか)	九州と韓国沿岸の汽水域におけるウナギ (<i>Anguilla japonica</i>) シラスの生態学的研究	ウナギ、標識放流、資源変動、環境、耳石、対馬暖流
松野 健 (応用力学研究所教授ほか)	長江起源水の挙動に関する研究	長江起源水、海洋環境、水環境の変化
柳 哲雄 (応用力学研究所教授ほか)	東アジア・東南アジア沿岸・縁辺海の物質輸送過程に関する研究	東南アジア、東アジア、沿岸海域、衛星画像、数値モデル
岡村 耕二 (情報基盤センター助教授ほか)	次世代インターネット技術のための研究開発と実証実験	次世代インターネット基盤技術、e-Learning、デジタルライブラリ、仮想現実技術、セキュリティ、遠隔医療教育、GRID
湯元 清文 (宙空環境研究センター長ほか)	太陽風から磁気赤道領域までのエネルギー・物質流入過程に伴う宙空環境変動の研究	環太平洋地磁気観測ネットワーク、宇宙天気研究
湯本 長伯 (産学連携センター教授ほか)	AIDIA/アジアインテリアデザインの研究と振興	アジア、インテリアデザイン、生活様式(起居様式)家具、製品、社会、文化、家族
大柿 哲朗 (健康科学センター教授ほか)	ネパールにおける健康科学的調査研究	ネパール、生活習慣病、疫学的研究、身体活動量、食生活

※アジア総合政策センターに寄せられたデータを元に作成

アジアの国際学術・学生交流 協定校一覧

2005年

国名等	大学等	大学間交流協定		部局間交流協定	
		学術交流	学生交流	学術交流	学生交流
インド	インドプラズマ研究所			○	
	インドネシア科学院生物学研究センター			○	
インドネシア	インドネシア大学			○	
	ガジャマダ大学	○	○		
	バンドン工科大学			○	
	延世大学校		○		
	韓国エネルギー研究院			○	
	韓国海洋研究所			○	
	韓国海洋大学校			○	
	韓国科学技術院			○	○
	慶尚大学校	○	○		
	慶熙大学校		○		
	慶北大学校	○	○		
	江原大学校	○	○		
	公州大学校			○	○
	高麗大学校	○	○		
	済州大学校	○	○		
	サムソン生命公益財団サムソンソウル病院			○	
韓国	順天大学校			○	○
	成均館大学校	○	○		
	西江大学校		○		
	全南大学校	○	○		
	全北大学校	○	○		
	ソウル大学校	○	○		
	忠南大学校	○	○		
	東亜大学校	○	○		
	東国大学校	○	○		
	東西大学校			○	
	釜慶大学校			○	○
	釜山大学校	○	○		
	浦項工科大学校	○	○		
	梨花女子大学校		○		
	嶺南大学校			○	○
シンガポール	シンガポール大学		○		
	シンガポールマネジメント大学	○	○		
スリランカ	ケラニヤ大学			○	
	カセサート大学			○	
	コンケン大学			○	
タイ	タマサート大学	○	○		○
	チェンマイ大学			○	○
	チュラロンコン大学	○	○		
	マヒドン大学	○	○		
	廈門大学			○	
	雲南農業大学			○	
	華東師範大学			○	
	華東政法学院			○	○
中国	華南農業大学	○			
	華南理工大学	○	○		
	吉林大学	○			
	協和医科大学			○	

国名等	大学等	大学間交流協定		部局間交流協定	
		学術交流	学生交流	学術交流	学生交流
中国	原子力工業省西南物理研究所			○	
	江西医学院			○	
	山東科技大学			○	
	山東大学			○	
	四川大学	○			
	暨南大学文学院			○	
	上海交通大学	○	○		
	上海社会科学院法学研究所			○	
	上海大学			○	
	上海第二医科大学			○	
	新疆師範大学	○	○		
	瀋陽薬科大学			○	○
	西安交通大学	○	○		
	西安冶金建筑学院			○	
	清華大学	○	○		
	西南農業大学			○	○
	西北農業大学			○	○
	浙江大学	○	○		
	第四軍医大学			○	
	大連理工大学			○	
	中国医科大学			○	
	中国科学院水利部水土保持研究所			○	
	中国科学院プラズマ物理研究所			○	
	中国科学技術大学	○			
	中国人民大学	○	○		
	中国農業科学院農業資源・農業区画研究所			○	○
	中国薬科大学			○	
	中山大学	○			
	中南林学院			○	
	南開大学			○	
	南京大学	○	○		
	南京理工大学			○	
	南京林業大学			○	○
	北京科技大学			○	
	北京航空航天大学	○	○		
	北京工商大学			○	
	北京語言文化大学			○	
	北京師範大学	○			
	北京大学	○			
	哈爾濱医科大学			○	
	復旦大学	○	○		
	香港大学			○	
	香港中文大学			○	
台湾	国立台湾大学		○		
	台湾国立中央大学			○	
バングラデシュ	バングラドゥ・シェイク・ムジブル・ラーマン農業大学			○	
	バングラデシュ農業大学			○	
フィリピン	アテネオ・デ・マニラ大学	○	○		
	フィリピン大学	○	○		
ベトナム	カントー大学			○	
	ノンラム大学			○	
	ハノイ農業大学			○	
マレーシア	マレーシアサラワク大学			○	
	プトラ・マレーシア大学			○	
モンゴル	モンゴル医科大学			○	
計		(6カ国・地域) 38機関	(7カ国・地域) 38機関	(11カ国・地域) 65機関	(5カ国・地域) 15機関

※同一機関内における複数の学部と締結している場合があります。

環太平洋 韓国研究 コンソーシアム 協定	大学等	締結部局
	ソウル大学校国際大学院韓国研究センター、高麗大学校民族文化研究院、UCLA韓国研究センター、ハワイ大学韓国研究センター、オーストラリア国立大学韓国研究センター、北京大学韓国研究センター、復旦大学韓国研究センター	韓国研究センター

■詳しくはホームページをご覧ください。

九州大学国際交流部（データ集） <http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/intlweb/>